~プロローグ~

インドの子ども達に"歌"をプレゼントするぞ!と意気込んだ2人、NOVA うさぎを購入して、こいつにヒンディー語で歌わせようと計画を立てました。でも、結局計画倒れで何の準備もしないまま飛行機に乗ることに…

ムンバイ訪問 報告

2004年9月22日(水)~29日(水) 花谷めぐむ

9月22日 (水)



●関空 14:00 発 エアーインディア (AI314)



機内では、NOVA うさぎのパペットを使った自己紹介の台本(ヒンディー語)を作ったり、ヒンディー語の歌(チュクチュクガリ (汽車ぽっぽ))の歌詞を音符に当てはめたりした。台本については、文法をスチュワーデスさんにチェックしてもらった。また歌は、武道あや子さんという友人が、CD から直接音を取って楽譜にしてくれていた。

●ムンバイ 23:55 (現地時間) 着

空港を出たら、夜中の 0:30 だった。深夜にも関わらず、Dr.Mehta さん、娘さんが自家用車で迎えに来てくれる。そのままホテルまで送ってもらう。ホテルに到着して、ほっとしたら、午前 3 時前だった。(途中、ガネーシャ祭りのみこしに遭遇。大きなガネーシャの像をのせたトラックをみんながロープで引っ張りながら練り歩いていた)

9月23日(木)

8:30

当初の予定では 9:30 にボンベイ・レプロシー・プロジェクト (BLP) のオフィスを訪問する予定だった。場所等が分からないので連絡することにしたが、早朝だったため、BLP の携帯電話に電話をする。Dr.Pai を名乗る人物(Hanatani と名前も指定していた)が、今ムンバイから離れており明朝帰るので今日の予定をキャンセルして欲しいと言われる。少し変だ



と思ったが、あまりに流ちょうに話すので(花谷・西村共にその人物と会話する)、 予定キャンセルを信じ込んだ。後から思えば、やはりオフィスに確認の電話をすべきだった。花谷・西村共に、予定キャンセルを信じて、インド流やなぁといいながら、 早朝着だったこともあり、ほっとして喜び、そのまま近くを散策(歩いて、旧ヴィクトリア駅まで行く)・ショッピング、昼食を取る。(初めて、ベジタリアン食堂に入って、ターリーを手で食べる。指が食欲を感じるという衝撃的な体験をする)

15:00

(旧ヴィクトリア駅)

ホテルに帰着。メッセージが沢山入っており、Dr.Ganapati、Dr.Pai、モンスーン教室のシスター及び子ども達が、13:30まで待っていてくれたとのこと。早朝の電話は、ニセ者だったことが判明する。恐縮する。電話の向こうでは犯人捜しが行われていた。謎の人物は不明のまま。(後で、おおよその目星はついた)

18:30

Dr.Ganapati から電話があり、やはり当初の予定通り、プロジェクトに関して夕食を取りながらディスカッションしたいと申し出がある。レストラン Pritam で食事しながら、Dr.Ganapati、Dr.Pai、西村、花谷で会合。

<議題>

1.BLP のメリットについて

医者集団である BLP が畑違いの教育に乗り出すにあたって、私たちが最も心配しているのは、本当に真剣に取り組んでくれるのかということである。BLP にもプロジェクトに関わる上でメリットが無ければ、このプロジェクトの存続は不可能と考えられる。そこで、単刀直入に、このプロジェクトに乗る BLP のメリットは何かと尋ねた。

(BLP の答え) まず、監督者、ケース・ワーカー、医師を任されることだという。学校に来ている子どもたちは、現在 40 数人のうち 35 人が Leprosy(感染者及び回復者)の子どもたちである。その子達一人一人については、詳しいカルテが作られていて識別が可能、BLP として継続的に追跡が可能である。また、教室を広げるにあたって、他のスラムから BLP の関わる Leprosy の子ども達を学校に出席させるよう手配済みでもある。遠くのスラムの子ども達を通わせるについては、公共輸送機関(バス等)の利用(従って計上されていた交通費が必要)、肉親による送り迎えを必要とする。

ひかりのおんぷつうしん 第105号 ふろく

<課題>

ストリート・チルドレン及び他の子ども達については、カルテのようなものがないため、健康診断 (medical checkup)で少なくとも追跡できるようにしてもらう。

2. シスターとの関係について

モンスーン教室については、現在シスターが運営している。ここに光の音符が入ると、関係する団体が 3 団体になって ややこしくなる可能性がある。また BLP とシスターとの関係がいまいち不明瞭であるため、シスターは、BLP が監督者として上に立つことを了承しているのかと尋ねた。

(BLP の答え) 両者双方に利益があるために、利害が一致している。現在のところシスターは了承しているようだ。

(**当方の見解**) シスターは具体的には知らされていないようだが、下手に自分たちが入るより、シスターとの折衝は全て BLP 当事者に任せた方がよいと判断する。

3. いつから開始できるか

(**BLP の答え**) 9月からするよう手はずは整えていたが、今まで延びた。OK が出れば、10月2日 (BLP の設立記念日) に開始する。

4. 奨学金

奨学金については、まずフォスター・チルドレン(別件の一対一の里親制度)については、後から行うことで了承を得た。 また、モンスーン教室の中に組み込まれている「奨学金」についても、フォスター・チルドレンと組み合わせることで別件として外したいと申し出る。

(**BLP の答え**) モンスーン教室の奨学金について、説明させて欲しい。現在、シスターが働いている教室では、やる気のある子を随時公立学校及び technical school に進学させている。既に何人かの子ども達が学校に復帰を果たした。公立学校に行かせるためには、制服やらいろいろと足りないものがある。そのために助成は必要。

(結論) モンスーン教室の中の奨学金について、別枠で切り離すという案は撤回する。当初通り予算を組み込む。 中身としては「奨学金」(一対一の里親制度)というよりは、全体を視野にいれた教育奨励金といった内容になるようだ。

<u>5. その他</u>

9月 24 日の見学の報告の中に絡めて述べるが、給食を作っている台所に電気がないこと、教室スペースが小さいこと、 また、特に Dr.Pai は、子ども達が裸足でいることなど、様々な話題が出た。これらについては後述する。

9月24日(金)

7:30

朝の貴重な時間を使って、チュクチュクガリの歌及び自己紹介の予行演習を行う。ホテルのボーイさんを 2 人、順次、部屋に招き入れてダメだししてもらう。

● 9:30 BLP のオフィス

BLPのオフィスでMr.Kamartが私たちを出迎えつつ、I am sorry about misinformation どーたらと言うのと、その話ぶりで、 昨日の予定キャンセルの「発信源」は、この人だろうと、ほぼ確信を得る。表向きはいたずら電話ということで収まった。

☆ Dr.Ganapati のオフィスでは、江上さんから送られたリハビリ用の指人形が、使い道のないまま置かれていた (使い方が分からないらしい)。これらの人形を使うための台本やら、利用方法を教えてもらいたいようだ。ただし、Leprosy による変形は子ども達にはあまり生じていない。(最近では発見が早く、変形が出る前に投薬で治るため) Leprosy に関しては、変形によるリハビリが必要なのは、大人である。

☆オフィスで、モンスーン教室などに出席している子ども達のカルテを見せてもらう。またその中の一人、Sushila を紹介される。11 歳だが、学校をドロップアウトして今度 2 学年から始めるという。この Sushila はとても絵が上手で、モンスーン教室で絵が習いたいと言っており、父親の許可も得て今後出席する予定。

Leprosy の子どもたちの他に、ポリオなど身体障害者の子ども達も BLP の守備範囲らしく、これらの子ども達のカルテも見せてもらう。ポリオの予防接種(ワクチン)は、インドでも無料で行われているようではある。



(Sushila)

●アクウォース (Acworth) ハンセン病病院及びモンスーン教室の視察

アクウォースハンセン病病院は、120年ほど前に建てられた建物で、広大な敷地の中、緑に囲まれたとてもよい立地の 病院である。その一角に教室があった。

教室を運営しているのはシスター Seraffin 及び、教師と補助教師である。シスターは週に1度来るが、毎日子ども達 の面倒を見ているのは教師2人である。教室は非常に小さく、30人ほどがいたが、それで教室はいっぱいだった。黒板 も古い。3歳から16歳までいっしょにいた。どのように授業が行われているかは不明(実質上、なかなか難しいかも)。 子ども達は自分たちが作ったという、ガラスの工芸作品やら簡単なエッチング作品、手芸工作などを見せてくれる。この ような工作は行われているようだ。また、何人かの男の子たちが、テープの歌(映画の歌)に合わせて本当に嬉しそうに 踊りを披露してくれた。



私たちも、NOVA うさぎを使って自己紹介、チュクチュクガリの歌を歌う。 ヒンディー 語は分かってもらえたと思うが(ホテルのボーイさんなどに指導してもらってダメだし してもらった)、子ども達は唖然としていた。ともかく、一応分かってもらったようだ(と 思っている)。

日本の精神科の病院に入院中のまりこさんについて西村が紹介し、Mr.Kingsley がヒ ンディー語(あるいはマラティ語)で子ども達に通訳し、彼女からのプレゼントである マンガ等を贈る。マンガは、字は読めなくとも絵を楽しむことができるので、かなり有 (NOVA うさぎ大活躍) 用というか非常に喜ばれたようだ。

また、前述したようにシスター Seraffin は、何人かの子ども達を公立学校及び technical school に進学させたことを誇 りに思っているようで、そのような努力はなされているようだ。

教室が狭いことについて BLP に苦言を呈すると、アクウォースハンセン病病院の院長 (Dr.Chimalgi) にかけあって、こ れから教室を大きくしてもらうつもりだと言った。(大まかなことについて、アクウォースハンセン病病院の院長とは話 がついているようだ)。キッチンを見せてもらうが、ここにも電気がない。ここに電気を引くことも了承してもらった。

シスターと話をするが、シスターは、このプロジェクトに関して細かなことは全く知らないという感触を得た。いきな り「光の教室」と改名することなどは、論外(というか失礼)のようだった。当面は、サポートに回る方がよさそうである。 両者間で何か問題が起きたら、BLPに任せる方が得策。

また、前日に、Dr.Pai が述べていたように、子ども達は裸足だった。病気に感染する確率が高くなる。できたら、靴あ るいはサンダルを履かせたい。が、Dr.Pai によれば、そういう習慣がないので、なかなか難しいようだ。衛生教育も必要 かも。この病院の敷地の隣には、公立学校がある。少し大きな子ども達の学校である。にぎやかな声が響いていた。

病院内の食堂でご飯を食べながら、絵のインストラクターを紹介される。 Mr.Srinivas である。確かにドローイングなどとても上手である。かわいい葉っぱ のガネーシャの絵もあった。後日話を聞けば、この Mr.Srinivas は、自身及び奥さ んも Leprosy 患者だった。当時、Leprosy 患者の子どもは政府の保護下に置かれ、 引き離されて孤児院にいれられ、そこで育てられたという。その後も、政府の保 護下に入ったままで、面会は許されず、娘さんが結婚の時も再会は果たせなかっ た。未だに、遠くから見ることはできるが、直接会うことはできないという。こ の Mr.Srinivas、一度は世間に出たが、食べられなくて(生活が困難で)また病院 に戻ってきているという。



昼食後、病院院長の Dr.Chimalgi の案内で、病院内に建てられた Leprosy 博物館、及び男性患者の病棟を見せてもらう。 患者が減って、病棟が空いたために博物館を作ったという。日本財団の資金援助により、立派なパネルが作られたという。 8000ドルだったらしい。



病棟には、病気は治ったものの身体の変形が著しく社会復帰できない患者がいた。 40 人ほどだろうか。電気が切れたままで、補助をお願いしたいみたいなニュアンス のことを Dr.Chimalgi に言われる (聞き流す)。

<課題> Dr.Pai は、少しずつと言うが、当面の課題としては…

- ・教室の拡張、設備(黒板など)
- キッチンの電気
- ・子ども達の衛生教育について
- ・実際の識字教育について
- 絵のインストラクターの導入についてきちんとフォローしてもらう
- 遠くから通ってくる子ども達のフォロー
- ・子ども達の健康診断 (medical checkup) について

ひかりのおんぷつうしん 第105号 ふろく

15:00

ダラビのヘルス・ケア・センターに行き、屋上から再びダラビのスラムの風景を眺める。ヘルスケア・ワーカーのギルジャと再会する。その後、BLP のオフィスに行き、プロジェクトの代金の半期分 (3,000 ドル) を支払い、グリーティングカード 100 枚を購入する。

17:00

ホテル帰着

9月25日(土)

この日は、強行スケジュールが組まれていた。加藤先生が日にちを1日間違えておられたために、VOICE 及び Paracham との会合が難しくなった。一旦は、間に無理に入れることにしたが、移動時間を考えるとどうも無理が生じるために、VOICE 及び Paracham との会合は全てキャンセル、次回に延期することにした。現在は、まだ識字教育に関する具体的な問題が上がってくる前なので、このプロジェクトが動き出して、具体的に識字教育に関する問題が生じてから相談するのが得策と判断する。

12:15

Dr.Mehta さんとの昼食会。Cricket Club of India にて。 出席者、Dr.Mehta、Dr.Pai、Mr.Kamart、Dr.Hargis Mistry(Foundation of Medical Research), 西村、花谷

18:30

Mr. 義村(元ムンバイ総領事館専門調査員)、Dr.Ganapati、Dr.Pai、西村、花谷で、夕食会。Hotel Pritam にて。

様々な話題が出たが…

Leprosy 患者は、インドでは日本ほどの差別にはさらされていないものの、運転免許を取ることが出来ない、また Life Insurance(生命保険)に入れない。Dr.Ganapati は、生命保険会社の協力で、ハンセン病患者を対象とした保険のプロジェクトを始めるとか…。

Rural area(農村地域)について。ボンベイを含めた3地域で(後述)8,000人の患者がいるが、それも100km圏内までのこと。200キロ離れると、誰も患者を知らないし、把握できていない。ここらへんの人たちは、Dr.Ganapatiによれば「人権がないどころか、人権が何たるかも知らない」人たちで、とても可哀想である。遠方すぎて、装具を届けることや与えることが難しい。壊れても、直せない。医者もいないし、アクセス出来ない。Dr.Ganapatiは、「自分たちは、病気を治せるし、リハビリの技術も知っている。自分たちにはtechnologyがあって、それを知っているのに届けることができない、私は、非常に罪悪感を感じる」と悲しそうな表情で話した。

Leprosy 患者であれば、結婚できないこともあるようだ。

Dr.Ganapati に、日本で資金捻出のために用意している「和泉元彌の狂言会」の話をすると、ぜひムンバイでもやって欲しいと言われる。

義村さんからは、やはり、<u>現地で、プロジェクトをいつも見てくれ、またこの人に聞けばとりあえず全部分かるというような現地要員(できれば日本人かインド人)が必要かもしれないと助言を受ける。</u>帰りに義村さんにホテルまでタクシーで送ってもらう道すがら、夜のインド門及びタージマハールホテルをちらっと見る。

9月26日(日)

この日は、予定が少し空いたので、午前中に義村さんと話をしつつ、ボンベイ市内を案内してもらう。水上に建てられたモスク (Haji Ali)、ガンジー記念館 (Mani Bhavan) などを回り、午後からは、いつだったか飛行機で隣に乗り合わせただけのおじちゃんが、わざわざアーメダバード (Ahmedabad) から飛行機で駆けつけてくれて、光の音符の販売用ショッピングに付き合ってくれ、Prince of Wales 博物館に連れて行ってくれた。夕食もご馳走になる。超親切なおじちゃん (Mr. Rajendra Panchal) だった。Ahmedabad でセラミックの工場を経営し、日本の会社とも取引があるという。お金もちのようなので、将来のスポンサーかもしれないと期待を残す。何事も縁。

(水上モスクには海の上にできた道の上を歩いていく。途中、波がやってきて、西村・花谷ともに足から下がびしょぬれになる。子ども達に大笑いされた。モスクの中には、靴を脱いで入った。信者ではないが、みなと同じように頭を垂れていると、大きな「はたき」のようなもので、頭やら肩を叩かれた。ありがたいもののようなので、そのままちょうだいする。ガンジー記念館は、なかなか見応えがあった。決して、立派な作りではないがガンジーが実践していた「シンプ

ルを追求する」気迫のようなものが伝わってきた。あと、Prince of Wales 博物館、現地人は 10 ルピー (30 円弱) なのに、外国人価格は 300 ルピー (900 円弱)。まぁ仕方がないけど。展示物は素晴らしいが、展示方法が少し稚拙で、なんというか思わず笑みがこぼれた)。インドの伝統的な細密画が特に素晴らしかった。

ガンジー記念館では、必要に迫られて、とうとうインド式トイレをマスターする。意外にというか、非常に快適だということを発見)

9月27日(月)

● 7:00 ホテル出発 BLP と農村地域へ

この日は、BLP がぜひ見せたいと言っていた農村地域 (rural area) に、早朝より車で出かける。車の中で、まずムンバイの郊外地域について説明を受ける。

これから回るのはムンバイの郊外地域 THANE 地方の Taluka という地域である。ここには、約20万人が住んでおり、把握できている Leprosy 患者は200人である。この Taluka には、この地方の中心地 (行政管轄所) Thane であり、ここにまず、一つ「BLP の出張診療所 (clinic)」がある。これが、地方における Leprosy 対策の本拠地になる。ここに各地のケース・ワーカーが集まってくる。私たちが訪問した時にも一人おり、彼女が THANE 地方の担当 Leprosy 患者を全て識別・把握している。このようなケース・ワーカー 2,3 人で一つの地域を担当しているという。彼女が同乗してくれて、各地の患者を訪問した。

もう一つ、BLP が把握している地域に RAIGAD 地方がある。ここには、30 万人が住んでおり、把握できている Leprosy 患者は 500 人。日本総領事館のサポートで、一年は Leprosy 患者の治療ができたが、総領事館のサポートは一年限りなので、その後は資金が払底して継続困難だという。考えてみればひどい話かも、と思う。

義村さんによれば、日本総領事館のサポートは、「草の根無償資金協力」(当時の名称)という制度を用いて実施したもので、このプログラム自体単年度での実施が条件(複数年にまたがる実施は財務省の予算制度上不可能)とされており、領事館としても、その点はBLPに十分説明し納得してもらって実施されたそうである。

「予算の取れる一年間でとにかく農村部のハンセン病患者さんの現状調査(マッピング)を集中的に行う、、、などが実施内容にあったと思いますが。当時わたしも担当していましたが、2年目からは、BLP 独自の資金でプログラムを継続できるよう BLP も事業計画を立てていました。結果として資金不足のためにプログラムの継続が出来ないと言うことは、BLP の計画に何らかの読み違いがあった面もあるかと思います(この点は、民間の資金だろうが、政府の資金だろうが、本当に注意する必要があると思います)。そういう意味でも現地で常にプロジェクトの進行状況を確認し、時として牽制するくらいの担当者が必要と感じます。」との意見をいただいた。

さらに、高速道路を走り、農村地域に行った。

最初の訪問地は、小さな村。大きな井戸を中心に掘っ立て小屋のような家が建つ。あまりに貧しいので、Mr.Kingsley に、ここはもしかして、アウト・カーストの村ですかと尋ねてみたら、これは普通の村だという。そこここに鶏が走り回り、牛も放し飼い、牛糞やら様々な懐かしい(私は岡山及び島根の田舎で育ったのでちょっと懐かしかった)臭いがする。テレビなどはなさそう。電気も通っていないようだった。



この村を含めて、近隣の地域を含めて一つの村となり、約200人が住む。そのうち、Leprosy患者は27人。家の前で、Dr.Paiが診察を始める。既に把握されている患者のフォロー・アップである。一人は、進行が認められない(治癒)ので、継続観察。一人には、足に傷が出来て感染しやすいので、特製スリッパを提供することになり、紙に足形を取っていた。こうして患者にスリッパを提供する。もう一人は、アルコール依存症だった。Leprosyもアルコール依存症も同じく神経が冒されるため、識別するのに注意を要するという。

この中で、突然、新たな患者が発見された。子どもである。全身のあちらこちらにパッチができている。今まで把握されていない子どもだ。実は、この村から少し歩いて幹線道路に出ると、そこには政府のヘルス・ケア・センターがあ



(診察をする Dr.Pai)

り、政府の医者が常駐している。そこに行けば、Leprosyの治療薬はタダでもらえる。 治療すれば約半年、重症でも1年で治る。Dr.Pai は、近くに政府の診療所があるの に、全く役に立たないと嘆いていた。こうやって、民間の団体がいちいち村に分け 入って、一人一人見なければ、患者を見つけることさえできないのだ。日本のよう に、行政がすべての住民を把握していて予防注射の案内などの広報活動をするよう な体制は全くできていない。政府は、全く、何も、村人のことを把握していないのだ。 ただし、共同体の中で、Leprosy患者が完全に受け入れられて生活しているのに は感銘をうけた。

ひかりのおんぷつうしん 第105号 ふろく

次に別の村に向かった。ここでは足に変形の出ている患者がいた。神経が冒されるために、足に傷が出来ても全く痛みを感じず、さらに傷がひどくなる。ここでは、包帯などのドレッシングキット (dressing kit) を渡していた。このキットの中には、包帯、ガーゼ、脱脂綿、antibiotic powder(抗生物質の粉)、そして洗濯粉 (!) が入っている。このキットを渡されて、患者は日々自分の傷を保護するようケース・ワーカーから指導を受ける。

さらに別の村に向かった。ここは、先ほどより少し裕福な村。各家にテレビがある。ここでも指に変形の生じた患者に hand gear を渡していた。母と息子が患者の家を訪問する。母は、40 年前にアクウォースハンセン病病院に 2,3 年かかったことがある。治癒しているが、変形が残っている。息子の方に特製スリッパを提供することになり、息子の足形をとる。

午前中いっぱいかかって3つの村を回り、診察した患者は10人未満。いかに、気の遠くなる作業かということが分かった。Dr.Ganapatiが、資金が足りない、ワーカーが足りないというのも分かる。ここで、ボンベイから100キロ圏内。100キロと言えば、京都を中心にすれば、名古屋までが入ってしまう。そう考えると、日本の小ささと、インドの広大さが思いやられる。

● 13:30 BLP 帰着

近くで昼食を取り、BLPのオフィスへ。先日の領収書及び、お礼状を受け取る。合わせて、24日に渡し損ねていたまりこさんの手紙(及び英訳付き)を渡す。

14:30

今日は、ガネーシャ祭りの最終日ということで、15:00 には交通規制が始まって、全ての海岸沿いの道路が閉鎖される。 早めに空港に行かないと危ないということで、15:00 前に大慌てで空港に向かう。16:00 前に空港に到着。

● 18:05 ムンバイ発 デリー行 エアーインディア (AI747) 搭乗

国内線では、搭乗券の裏に写真を撮られて印刷されるのでびっくりする。

● 20:00 デリー着

中島さんが迎えに来ているはずだが、いくら待っても来ない。行き違いが生じたようで、仕方がないので、自力でたどり着くことにする。prepaid タクシーを使って、おじちゃんに道を探してもらいながらなんとか World Buddhist Center にたどりつく。中島さんは、別の国内線の出口で待っていてくれたそうだ。途中で、私たちを追い越して先に宿舎に到着し、戸口で待っていてくれた。22:00 前になっていた。ここは、なかなかきれいで快適な空間だった。

ただし、その晩、朝に農村で飲んだ生水の影響か、西村、花谷両者ともに腹痛に悩まされる。特に西村の衰弱がひどい。

9月28日(火)

● 9:30 JICA オフィス

中島さんにリキシャに乗せてもらって、デリーの JICA オフィスに酒井所長を訪ねる。30 分ほど歓談。 今後の考えられる課題としては

- ・現地責任者となれるようなインド人が見つけられるといい
- ・このプロジェクトの先(ずっと先)の法人化も視野 とりあえず、今のところは基礎固めでしょうかねぇということでした。

● 14:30 中島さんの紹介で、川合美加さんと会合

川合美加さんは、デリーのスラムで、ゴミなどそこらへんに手近にあるものを使って工作を子ども達に教えているスラムのお姉さんである。本当は、デリーのスラムに行く予定だったが、西村の体力消耗がひどく次回に見合わせる。その代わり、じっくりと話を聞くことができた。

川合さんは、Butterfly という NGO 組織に協力して働いている。ストリート・チルドレンは常に移動しているため、子ども達と出会えるアクセスポイントという地点を用意する。このポイントも常に変わるが、常時 15 カ所ぐらいで、子ども達に会えるようにしているという。月曜から金曜まで、午前は $10:30\sim14:00$ 、午後は $14:30\sim17:30$ で、交替で行っている。他の活動には、ストリート・チルドレンニュースなどを集めた「新聞発行」、演劇(ムービースターになりたい子ども達とか)、クリケット、サッカー、識字教育、ダンス、あと、health program というものもある。この health program というのは、医療にかかれない子ども達のために、1 人が 5 ルピーずつ払って、集めておき、誰かが病気になったらその中から使うという、つまり今でも田舎に残っている (島根の田舎には残っています) 頼母子 (たのもし) 講みたいなシステムである。

あと、私設銀行もあり、毎月一定額貯金して、1年間続けられた子には10%の利子が付くとか、また信用があって1年間続けられる子には、何かの店を出すときの資金融資もしているという。なかなか面白いシステムなので驚いた。

7

この Butterfly という NGO 組織は、働く子どもの実態を知らせるために、海外に子どもたちを行かせて presentation など行わせているらしい (結構、子ども達は場慣れしているらしい)。

● 18:30 中島さんの紹介で、矢野藍子さんとの会合

矢野さんは、現在デリーの大使館で働いている。以前は、グジャラート州及びムンバイで、識字教育の NGO に携わった経験がある。大学がキリスト教系だったせいもあり、NGO もその関係だった。実際に活動するのは、現地のキリスト教系の組織であり、日本側としてはひたすら資金捻出に走り回っているという感じだったらしい。

現地の責任者が神父さんなど一般的には信用のある人だったので、それに任せっきりという感じだったらしい(BLP もお医者さん集団でその点では信用がおけるかも)が、1年に一度ぐらいは行って、財政面でのチェックはいれていた。識字教育の他に、衛生教育なども行っていたという。まだまだ話がしたかったが、空港に行く時間が迫ってきたため、時間切れ。

● 20:00 前

タクシーで、デリーの空港に向かう。デリーは首都だけあって都会でした。都会は、看板の文字は違っても、どこでも同じような風景なので、面白みがないかも。

(中島さんとの雑談)

リキシャに乗っている間に、中島さんとの雑談の中で面白い発想が!

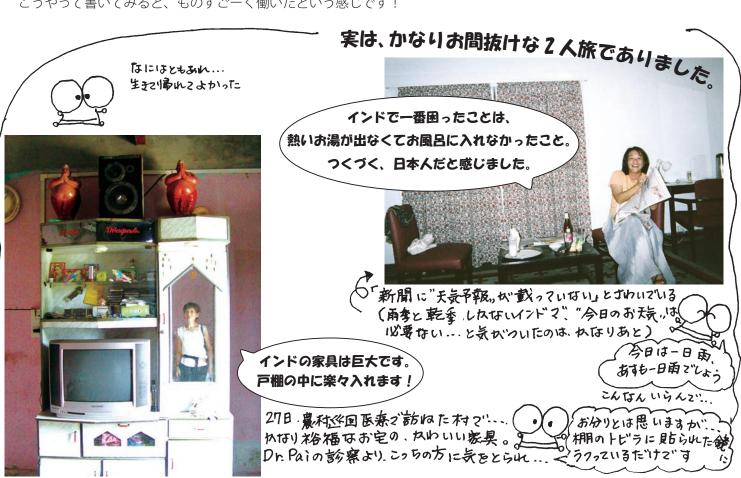
Dr.Ganapati が和泉元彌をムンバイに連れて来てコンサートして欲しいと言ったという話をしたら、そら面白い!、節子さんがサリー着てインドにいるだけでも絵になるし、和泉元彌がインドの舞踊とジョイントするのも面白い。出版社やテレビ局も話を持ちかけたら乗ってくるんじゃないでしょうかねぇと大乗り気でした。さすが、テレビ世代というか、画面が浮かぶという発想が若くて感動した。

● 23:30 (30 分以上遅れ 29 日 0:30 頃) デリー発 エアーインディア (AI315)

9月29日 (水)

● 12:35 関西空港着

はぁ~、お疲れさまでした! こうやって書いてみると、ものすご一く働いたという感じです!



2004 年 9 月 30 日(木) 毎日新聞・夕刊

光の教室」の生徒になる子どもたち

=ムンバイ市内の教室になる小屋で (「光の音符」提供)

に募集し、支援の拡大を目指 ェクト(BLP)」と連携。 開校する。スタッフは、現地 り代表)やハンセン病療養所 の教室」が、京都市の市民グ な子どもの識字センター「光 奨学金を提供する里親も同時 インド人医師らのNGO「ボ ンバイのスラム街に、ハンセ ループ「光の音符」 ノベイ・レプロシー・プロジ ノ病や貧困が原因で就学困難 **介所者らの支援で10月2日、** インド西部の商業都市・ム (西村ゆ

で医師の父、西占貢さんの 地に葬られた京都大名誉教授 村代表はハンセン病診療に尽 来 月 セ

国内のハンセン病療養所入 ッフやボランティア、日本 見込まれる運営費は、 供。年約160万円かかると なく医師も常駐し、 子どもたちに食事を提供して いた小屋を使い、 約40人を集めて開く。 現地で 教師だけで 食事も提

くしてインドで亡くなり、

サートなどを続けている。西 めの演奏会や病院の出張コン

「光の音符」は障害者のた

今回のプロジェクトが始ま けられない子どもに接し、 病や貧困に苦しみ教育を受 墓を22年に訪問。スラム街で を断念した2~15歳の子ども 街周辺に住み病や貧困で学業 教室は、ムンバイのスラム

差し始めた「光 インド・ムンバイ

民 市

じ病で苦しむ子どものために 少しでも役に立ちたい」と話 55万円を寄付。 同園自治会会 園入所者や職員らが賛同し約 長の山本英郎さん(64)は「同 、ンセン病療養所、邑久光明 プロジェクトには岡山県の

所者、 バザーなどの形で支えてい リティーコンサートや寄付、 中の人などが共に支援。チャ プロジェクトは子どもを持 精神医療でリハビリ

病への偏見や差別も取り除き 皿になることも目的。「光の セン病の元患者の思いの受け もを支援することでハンセン つことを許されなかったハン 音符」 スタッフは 「共に子ど